

令和5年2月28日

緑小だより

3月号

横浜市立緑小学校



ふれあい 学びあい みとめあう みどりっ子

Mail : y3midori@edu.city.yokohama.jp

URL <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/midori>

別れの季節!!

学校長 能城 順一

早いもので、令和4年度も、最後の月となる3月を迎えることとなりました。いよいよ17日には6年生の卒業証書授与式が、そして24日には1年生から5年生までの修了式が実施されます。私は、毎年のことではありますが、3月の学校便りを綴っておりますと、この3月が「別れの季節」であることを、改めて感じてしまいます。私事なのですが、私の心にいつまでも残る「別れ」の風景を綴らせてください。

私の故郷は、「讃岐うどん」で知られる四国の香川県です。高校卒業までは、この故郷で過ごしました。すでに他界しておりますが、父は着物を扱う職人でした。私が高校3年生の夏頃でしたか、「大学に進学するために横浜に行きたい」と、自分の気持ちを父に話した時がありました。父は、「そうか」とだけ言い、ひどく寂しそうな表情であったことを記憶しております。父は職人でしたので、やはり、私にもその道に進んでほしかったのでしょう、言葉にはしませんでした。その表情からは父の気持ちが痛いほど伝わってきました。

私の忘れられない3月の「別れ」の風景は、高校卒業後の3月末に、横浜に行くために故郷を離れる時の風景です。当時は、瀬戸大橋はまだ完成しておらず、宇高連絡船をつかって本州に渡っていきます。船での「別れ」の風景は特別です。見送ってくれる父と母の姿が小さくなり、慣れ親しんだ港の風景も街の灯りも、船が進むにつれて小さくなります。寂しさで胸が絞めつけられるように感じたこの風景は、私にとって決して忘れることのない風景です。

それから横浜の大学で4年を過ごした私は、今度は「横浜で小学校の教員になりたい」と、父に電話で自分の気持ちを話しました。その時も父は、電話口の向こうから「そうか」というだけでした。私はその後、横浜で小学校の教員となり、私の3つ下の弟が、父の後を継いで着物を扱う職人となりました。そんな父は今から20年前に他界し、父の後を継いだ弟も、今から6年前に闘病の末に、若くして天に召されました。自分の好きな道を進んでいくことを、何も言わずに認めてくれた父、自分の事しか考えない自分勝手な兄に代わって父の後を継いで職人となった弟には、感謝しても感謝しきれないほどの「ありがとうございました」の思いがあります。そんな思いが強くなるのも、宇高連絡船からの風景を思い出すこの「別れの季節」である3月です。

17日に本校を巣立っていく6年生の子どもたちは、この3年間の新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響で、学校生活において最も「我慢」を強いられた子どもたちと言えるでしょう。それとともに、「当たり前前の生活ができる」ことの「ありがたさ」を最も学んだ子どもたちとも言えるでしょう。全教職員で心から巣立っていく子どもたちの門出を祝したいと思えます。そして、「ありがとう」にあふれた「別れの時」となるよう、6年生の子どもたちと全教職員で、卒業証書授与式を創り上げていきます。

最後になりますが、令和4年度は社会情勢が「With コロナ」へと進んだことに伴い、教育現場もコロナ禍以前の教育活動を少しでも取り戻していこうと試行を重ねた1年間でした。保護者の皆様・地域の皆様には、本年度も多大なるお力添えをいただきましたこと、心より感謝申し上げます。令和4年度最後の3月も、本校の子どもたち「みどりっ子」を温かく見守ってくださいますようお願いいたします。